

I はじめに

1 研究経過

昭和54年度の養護学校義務制実施以降、子どもたちの障害の重度・重複、多様化の波が全国の特殊教育におしよせた。とりわけ、自閉的傾向児の激増は本校でも、その例外ではなかった。その対応として、個別・集団学習の両面から実践的な研究が進められてきた。

また、子どもたちの障害や実態に、より対応した教育内容を組み立てるために、本校では昭和61年度・62年度にわたり、3回目の教育課程の編成が行われた。特に、自閉的傾向児の関わり方、指導のあり方については、よく論議されたところである。

そこで、今年度の研究についてであるが、昨年度より始められた少人数のグループによる課題別研究を進めてきたのである。1年目は課題別研究の基本的な考え方を中心に手さぐりの状態であったが、今年度はさらにその研究を深め、多くの実践をつみかさねてきた。

2 研究概要

(1) 研究主題

特殊教育の現場において、近年、様々な理論、考え方が出てきている。その理論、考え方をういて、子どもたちにいろいろな方向からアプローチしていこうと考えた。そして、子どもたちの成長、発達を援助していくことが、我々の重要な任務ではないだろうか。

そこで、主題を昨年同様「発達と障害に応じた指導」とし、それぞれのグループに別れて研究に入った。

(2) 研究グループ（課題）

今年度も昨年度と同様に6つのグループで研究が進められてきた。しかし、この研究グループは基本的に一年単位で研究に取り組むことになっており、今年度当初、改ためてそのグループの編成が見直された。その結果、5つのグループが継続して研究に取り組むことになり、更に、1つの新しい研究グループが誕生したのである。

それでは、この6つの分科会（研究グループ）がどうしてできたのか、その必要性や意義、また、2年目としての特徴を簡単に述べて概要としておきたい。

① 教科の学習を考える

このグループの目的は、授業の中味について見直し、子どもの感性をゆり動かすことを中心とした、新しい形の授業を考えることにある。

現在の教科の学習内容は、一つの系統性に沿って準備されている。しかし、子どもたちの中での能力差、個人における発達のアンバランスを考えると、そのまま指導していたのでは、なかなか難しいものがある。そこで、子ども自ら「学びたい」、「知りたい」と言う要求を引き出すような感動や共感ができる体験の中で、関心の目を育てていくことが、大切だと考えた。

本年度の研究グループの考え方は、昨年度と基本的には変わらないが、子供の理解の道すじに沿った活動を準備することが大切だと思う。より多くの実践を積み重ね、理論を裏づけるために実践が行われた。2年目はより多くの実践を通して、学習内容、学習形態が考えるようになった。

② からだづくりを考える

人間が人間らしく生きるための必要条件の第一に「健康」があげられる。その健康を支える条件には「運動」「休憩（睡眠）」「栄養」等があるが、その第一はやはり「運動」を中心とした積極的な活動、即ち「からだづくり」であろう。しかし現在、我々をとりまく環境は決して好ましいものではない。自然環境、社会環境いずれを見ても子どもたちの成長にとってプラスの要因は無きに等しいといえよう。このような状況の中で我々教師ができることは何だろうか。やはり学校生活を中心にして子どもたちができる遊びや活動を与え、指導し、定着させてやることではないか。そして、少しでも楽しく活発に動ける「からだ」にしてやることができれば、と考えた。

昨年度は子どもたちが夢中になれる遊びや活動を与えることを中心に実践を重ねてきた。今年度は基礎的なからだづくりを目指してリトミックの見直しをし、また比較的障害の重い生徒の運動機能向上の一手段としてトランポリンをとり上げ、実践を進めてきた。

③ コミュニケーションを考える

良きコミュニケーション（相互関係）は、ことばの獲得のみならず、すべての学習の基礎である。ところがこの学習の基礎ともいえるコミュニケーションにおいて、本校の8割近くの児童・生徒につまづきがみられる。

本研究グループではこのような子ども達と大人側のかかわりについてインリアルの手法に基づき、分析を進めてきた。大人の対応はこれでよいか、子どもの反応をどう読みとるか、教材が適切であるかなどコミュニケーションを成立させるために、何が大切かを明らかにしようとしてきた。

昨年度は、インリアル理論について主に学んできたが、今年度はグループ構成員一人ひとりが事例を持ちよりVTR分析を行い、子ども達に対してよりよい大人側のかかわり方について研究を重ねてきた。

④ パソコンの利用について考える

今日、子どもたちの家庭での遊びをみると、テレビを見たり、テレビゲームをして過ごす子が多い。本校の生徒たちについても同じ傾向にある。このテレビゲームの魅力は、映像や音声のすばらしさと、その変化にあると言われるが、これ以上に操作側の押しボタンやキー操作に反応して、テレビ画面が変わるという双方向的な機能をもっていることが、大きいと思われる。

一方、このような映像文化の発展は、いろいろな分野に影響を及ぼし、その結果としてパソコンの普及がある。会社はもちろん、学校の8割にパソコンが導入されてきている。その中で、この新教育機器をどのように教育現場で活用していくかが課題とされている。

⑤ 性指導について考える

性指導の必要性は誰もが認めており、障害児も例外ではない。障害児では、一人ひとりの能力、成長、発達の個人差が著しいが、その子なりの自立が求められ、指導されなければならない。その指導も生活指導的にのみ終らず、教科、特別活動等でも行われ、教えるべきことはきちんと教える姿勢でのぞむことが大切である。

昨年度は、専門家のお話を聞き、グループによる話し合いと授業研究を重ねて、性の問題を考えてきた。指導基盤が整ってきたといえる。今年度は、学習実践をさらに積み重ねて、性の指導について考えていくと共に、家庭との連絡、協力を深めることにし、父母との話し合い、学習の場を持つことにした。

⑥ 読み聞かせについて考える

この研究グループは本年度初めてできたグループである。しかし、以前から各々のクラス内で絵本は読まれていたし、その必要性も感じていた。また、その中で全国的にも珍しい高等部での授業としての読み聞かせも、既に8年前からなされていたのである。

この研究グループが発足して、読み聞かせを継続する中で、子どもたちはより一層本に対する楽しみを感じてきた。そこで、研究実践の方法を2つに分けた。その1つは各クラスで意図的に読み聞かせの活動に取り組むことであり、もう1つは、全校的な規模で行う「絵本の日」での読み聞かせである。このような実践を通して、子どもたちが喜び、心の豊かさをもつ絵本を選ぶことや、各部（小・中・高）での本の配架や補充などを行なっている。

（今井康弘）